

NT

NISSEKI TOKYO

2018
Autumn
Vol.19

特集

今、見てほしい
日赤の国際活動。

Contents

04 平成30年7月豪雨災害 日本赤十字社の活動

08 れっどくろす News&Topics

特集

10 今、見てほしい 日赤の国際活動。

23 赤十字Supporters

24 Hospital Referral
武蔵野赤十字病院／大森赤十字病院／葛飾赤十字産院

27 献血 NEWS

28 福祉施設 NEWS

29 活動資金協力者(社)・団体のご紹介

30 行け!OLレポーター オカモト★ 日赤とつげきレポ —vol.13 新宿西口献血ルーム編—

31 NT information

32 プレゼント

34 Rediscovery TOKYO —第12回 谷根千—



© Lynette Nyman/IFRC

12月1日～25日は「NHK海外たすけあい」キャンペーン

日本赤十字社は毎年12月1日～25日に、NHKと共催で募金キャンペーン「NHK海外たすけあい」を実施しています。お寄せいただいた寄付は、世界中の紛争、災害、病気で苦しむ人々の支援に役立てられます。皆様のご協力をお願いします。

赤十字ならではの支援の特色

- 世界の191の国と地域にある赤十字のネットワークを活用し、ニーズに即した**直接的**な支援ができます。
- 日頃から地域に根ざして活動しているからこそ、いち早く**継続的**な支援ができます。
- 中立の立場で活動しているからこそ、紛争地等国際社会の**支援が届きにくい地域にも**支援を届けられます。

Instagram 海外たすけあい **検索**

赤十字シンポジウム2018

世界の防災力を高める “キーワードはレジリエンス”

日程 11月3日(土) 14:00～16:00

場所 表参道ヒルズ地下3階 スペース オー

主催 日本赤十字社、NHK

詳細はこちら→





平成30年7月豪雨災害の特徴

1 長時間にわたる広域の豪雨をもたらした甚大な被害

河川の氾濫による洪水や陸地内での増水による浸水をはじめ、地すべりや崖崩れなどの土砂災害が発生し、各地に甚大な被害をもたらしました。

2 在宅避難

自宅の1階部分は被害を受けたものの2階部分は無事であったため、在宅避難されている方が多くいました。

3 復旧を妨げる記録的な猛暑

過酷な猛暑により、熱中症で体調を崩す方が多く、避難生活や復旧作業に多くの困難が生じました。



平成30年7月豪雨災害
日本赤十字社の活動



救うことを、つづける。

“苦しんでいる人を救いたい”
災害現場でのいち早い救護活動を
息の長い支援を
日本赤十字社はつづけます。

被災地での支援活動

数字で見る日本赤十字社の活動（8月17日現在）



派遣した救護班
日赤DMAT合計23班を含む

87班



毛布配布数

10,099枚



派遣した災害医療コーディネートチーム

19班



安眠セット配布数

1,493セット



派遣したこころのケア班

36班



緊急セット配布数

2,536セット



活動した赤十字ボランティア
（物資搬送、ボランティアセンター運営ほか）

371人



タオルケット配布数

289枚

医療救護活動・こころのケア

被害の大きい岡山県や広島県を中心に、全国から医師・看護師などからなる救護班を派遣し、避難所での巡回診療や救護所などで活動にあたりました。また、長期化する避難生活によるストレスを軽減するため、こころのケア班が避難所などのニーズ調査を踏まえ、地域巡回や行政職員・避難管理者などへの支援も行いました。



衛生・健康管理

家屋の浸水などにより、避難所生活を余儀なくされた方が多いため、健康管理や衛生面での注意を呼びかけました。エコノミークラス症候群を予防するための弾性ストッキングの配付や、熱中症対策の呼びかけなども行いました。

ボランティアによる活動

赤十字防災ボランティアや赤十字奉仕団などが救護班のナビゲーションや物資の積み込み・搬送、義援金の受付などを行いました。また、熱中症予防や避難所を清潔に保つことによる感染症予防の呼びかけを行いました。



救援物資の配分

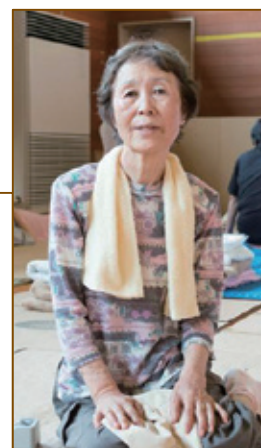
避難所のニーズ調査に基づき、日赤が備蓄する救援物資（毛布、安眠セット、緊急セットなど）をボランティアとともに被災された方へ迅速に配付。また、断水が続く地域には、貯水タンクと洗濯機を設置し、生活支援を行いました。

被災された方の声



避難所で救護班に足のけがを診てもらいました。対応が早くて、親切にしてもらいました。これからも社会に貢献する日本赤十字社であって欲しいです。

富岡 栄作さん（54歳）



糖尿病なのですが、避難所に救護班の方々がいてくれて安心して過ごせました。日本赤十字社はいろいろな支援をされていて頼もしいです。

鈴木 登清子さん（77歳）

子どもが自分と向き合う場 毎年恒例、夏のトレセンを開催

東京都支部では毎年、夏に都内の青少年赤十字加盟校の児童・生徒を対象に「リーダーシップ・トレーニングセンター（通称：トレセン）」を開催しています。経験豊かな教員がスタッフとなり、独自のプログラムと集団生活を通じて、メンバー1人ひとりのリーダーシップを養成することを目的としています。



すころくで防災について学びました

今年度は、小・中・高校生あわせて85人が参加。それぞれ3泊4日で非常炊き出しや救急法、福祉体験、国際理解プログラムなどを体験しました。

体験したメンバーからは、「皆が同じ目的に向かって一生懸命頑張っている環境では、何の気負いも恥じらいもなく頑張れるのだと感じた」「深く考えさせられるプログラムが多くて充実した4日間だった」「リーダーは自分でもなれると思った。学校でもなれるようにしたい」「自分から意見を言ったり、うまく伝えることが苦手だったけれど、トレセンを通じて、うまくまとめたり、自ら進んで発言することができた」などの声がありました。

参加したメンバーは、学んだことをこれから学校で活かし、リーダーシップを発揮していきます。



高齢者の動作や気持ちを疑似体験



リーダーシップについて考え、共有しました

首都直下地震に備える 9都県市合同防災訓練に参加



災害時は迅速な対応が求められます

東京都支部は9月2日、東京都を含む9都県市合同の防災訓練に参加しました。震災時における行政、各防災機関との連携の強化、自助・共助に基づく地域防災力の向上が目的。39回目となる今回は中央区と港区で実施され、雨のなか地元住民や関係機関の職員などが参加しました。防災関係機関として参加した東京都支部も、搬送されてきた傷病者の医療救護活動訓練などを行い、災害対応能力向上と関係機関との連携強化に努めました。

本場の味を子どもたちと 黒龍江省同郷会と餃子作り

赤十字子供の家で7月4日、一般財団法人在日黒龍江省同郷会の皆さんが手作り餃子をふるまってくださいました。本場の餃子は皮も手作り。同郷会の皆さんに教えてもらいながら、子どもたちも真剣な表情でお手伝いしました。

できあがった大皿いっぱいの餃子をお腹いっぱい食べた子どもたちは、本場の味に大満足している様子でした。将来はコックさんになる夢ができたかも!?



おいしい餃子の皮作りを教わりました

地域の赤十字施設を体験 血液センター見学会を実施



血液製剤の仕組みに驚きの声も

東京都支部は8月31日、日本赤十字社関東甲信越ブロック血液センター（江東区）で「減災セミナー・血液センター見学会」を開催し、地域住民の方などが参加しました。身近なものを使った応急手当の方法を学び、血液の検査・製造工程を見学した参加者からは「災害への事前の備えの重要性に改めて気づいた」「献血後の血液が、こんなに多くの検査を経て患者さんの元に届いているとは知らなかった」などの声があがりました。

東京・ソウル・北京の中高生が東京都内で交流 青少年赤十字国際交流プログラム

東京都支部では2001年から、大韓赤十字社ソウル特別市支社（韓国）と北京市紅十字会（中国）との間で、情報交換と交流を目的とした事業を展開しています。

今年は、7月23日～28日にかけて東京で開催され、各国から青少年赤十字の中高生メンバー10人が参加しました。プログラムでは、各国の青少年赤十字活動を紹介し合うほか、血液センターなど開催国である日本

赤十字社の施設見学や日本文化の体験などを通じて交流を深めました。2日目には、青少年赤十字加盟校である新宿区立西早稲田中学校を訪問し、JRC部（青少年赤十字活動を行う部活動）で取り組んでいるエコキャップの回収、活動の説明を受け、それを使ったエコキャップアートを体験しました。

参加したメンバーからは、「交流を通して私たちは皆、同じ人間として、また、学生とし

て本当にかけがえのない仲間になった」「（交流した）6日間の1分1秒が、私の人生において大切な宝物」「どの国も、考え方や習慣、価値観に違いがあるのは当然のこと。親しみをもって接していき、打ち解けていくことが重要だということを学んだ」などの感想がありました。



アイスブレイクで、まず“心の国境”を越えます



エコキャップアートの体験



かけがえのない仲間たち

保健衛生の向上にむけて 日赤看護師がフィリピンで活動



日本での経験が世界で活かされます

日本赤十字社は2017年から、フィリピンのセブ島北部で地域保健衛生事業を、フィリピン赤十字社と協力して行っています。今年2月から6か月間、武蔵野赤十字病院の加藤加奈子看護師が現地に派遣され、セブ本島から複数の離島に渡り、衛生的な割礼支援などの活動に取り組みました。帰国した加藤看護師は、「この経験を多くの人に伝えていきたい。また、若い職員には積極的に海外での活動に挑戦してほしい」と語りました。

お知らせ

プロが教える赤十字終活セミナー

～企業経営者のみなさまへ 事業・資産の円滑な承継のために～

日時 平成30年11月22日(木)
15:30～17:00

会場 日本赤十字社東京都支部
※最寄駅：「東新宿駅」B1出口すぐ

講師 三井住友銀行
プライベート・アドバイザー部長
藤井 秀樹氏

参加費
無料



企業経営者の高齢化が進むなか、「どのように次世代に事業を引き継ぐか」が重要な経営課題となっています。後継者がいる場合は、その育成や事業・財産の相続をどうするか。後継者がいない場合は、安心して事業を託せる相手を探さねばなりません。本セミナーでは、「早期着手が成功の秘訣」と言われる事業承継の検討ポイントをお伝えします。

お申し込み・お問い合わせ

日本赤十字社東京都支部 振興課
TEL：03-5273-6743
メール：shinko@tokyo.jrc.or.jp

今、見てほしい 日赤の国際活動。

日本で地震や大雨などの災害によって、傷つき苦しむ人たちがいるのと同じように、世界でも災害や紛争によって傷つき、助けを必要としている人たちがいます。

日本赤十字社は、国内にとどまらず、国外で起こる危機に対しても、世界の赤十字の一員として活動を展開しています。

日本赤十字社の使命「苦しんでいる人を救いたい」という思いを結集し、いかなる状況下でも、人間のいのちと健康、尊厳を守る」を胸に抱き、取り組む国際活動について、今回の特集をきっかけに少しでも興味を持っていただけたらと思います。



目の前で苦しんでいる人が
いたら救う、
それが私たちの使命です。



朝倉 裕貴 Yuki Asakura

2002年に看護師免許を取得し、2009年から武蔵野赤十字病院に勤務（救急外来）。2011年4月から2014年3月まで名古屋第二赤十字病院・国際医療救援部に勤務。2013年にはイラク北部の戦傷外科専門病院で医療活動に従事した。1980年生まれ、38歳。

紛争地域で救援活動に従事 看護師・朝倉裕貴さん（武蔵野赤十字病院）

紛争地域で人道支援に取り組む赤十字国際委員会（ICRC）。赤十字運動のパートナーである日本赤十字社も職員を派遣しています。武蔵野赤十字病院の看護師・朝倉裕貴さんは、内戦が続く南スーダンに2回にわたり派遣され、銃で撃たれて傷を負った兵士や住民の治療にあたりました。周囲を銃弾が飛び交い、設備も不十分ななかで、いのちを救うための必死の活動です。

ICRCとIFRC：赤十字の国際組織には、紛争地域で活動する赤十字国際委員会（ICRC）と、災害救護など平時の活動を担当する国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）の2つがあり、世界191の国と地域の赤十字社・赤新月社と協力して各地で活動しています。

弾丸の摘出手術も

朝倉さんが南スーダンに派遣されたのは、2016年3月9月と、2017年5月～9月。2016年7月に首都ジュバで激しい戦闘が起こった時も現地にいました。いまでも政府軍と反政府軍の争いは続いています。

南スーダンにおけるICRCの医療支援チームは、外科医と麻酔医、手術室ナースと病棟ナースの4人で構成。朝倉さんは手術室ナースとして銃創（銃で撃たれた傷）などの手術・治療や処置にあたりました。

このほか、手術用の器材の消毒や滅菌などもすべて自分たちで行なう必要があります。手術件数



1 スタッフたちの宿泊地／2 現地の子もたちと／3 朝倉さんのチーム。ニュージーランド、イタリア、ノルウェーの各国赤十字社のメンバーと／4 整備前の手術室／5 整備後の手術室。厳しい環境下でもできるかぎりの準備を行う／6 手術のようす（写真中央）

は月80～100件にのぼりました。赤十字は「中立・公平・独立」が原則です。政府軍・反政府軍関係なく、治療を必要とする負傷者の処置にあたります。飛行機やヘリコプターで政府側と反政府側を自由に行き来できるのは「信頼されているからなんです」と朝倉さんは話します。

患者を助けられず 涙を流したことも

病院に運び込まれる患者の約7割は銃で撃たれた兵士や住民です。襲撃を受けた村の小さな女の子が、頭蓋骨が骨折するほどの傷と銃弾による傷を負って運び込まれたことも。この時は幸い、いのちを救うことができました。

助けられなかったいのちもあります。ある時、銃弾を受けた出産間近の妊婦が運び込まれました。銃弾がお腹を貫通し、お腹の中の子どもは亡くなりました。「もう完全に赤ちゃんの形をしていました。この時はさすがに感情をコントロールすることができませんでした」と朝倉さん。

患者の大半は兵士たち。朝倉さんは「僕たちが必死で治療して助

病院がなくなる。 希望が消える。

も し今、あなたの周りから病院がなくなってしまうたら…。

救急車も、薬も、医師や看護師も消えてしまったら…。

日本では病气やけがをしても病院に行けば治療が受けられます。しかし世界に目を向けると、悲惨な紛争や暴力が続くなか、人命救助を真っ先に行うべき病院や医療従事者そのものが攻撃を受ける事例があとを絶ちません。



攻撃により破壊された医療施設

2016年5月3日、国連安全保障理事会は、病院や医療従事者への攻撃は戦争時であっても許されず戦争犯罪であると強調し、国際人道法の順守を促す決議を採択しました。しかし、今でも戦闘地域では医療スタッフが攻撃されています。こうした現状を改めるためには、平和な

国に住む私たち一人ひとりも、病院や医療従事者は攻撃対象ではないことをしっかりと理解し、国際人道法が守られていない現状に声をあげていかなければなりません。

赤十字をはじめとする人道支援スタッフへの攻撃もやみません。4月21日には、赤十字国際委員会（ICRC）の保護要員としてイエメンで働いていた職員が銃弾に倒れました。レバノン赤十字社で救急法のボランティアや職員として長年働き、亡くなったこの日も訪問先の収容所に向かう途中でした。

中東のイエメンでは世界最悪と言われる人道危機が続く、3年も続く紛争で1万人近くが死亡。2000万人以上が支援を必要としており、国際赤十字も活動を続けています。

病院も、医療従事者も、人道支援スタッフも、決して攻撃の対象にはなりません。赤十字は苦しんでいる人を救うために活動を続けるとともに、こうした状況が少しでも改善されるよう、訴えていきます。

けても、彼らはまた戦場に戻っていく。果たして自分たちが提供する医療は本当に人を救っているのかと悩むこともありま

す」と語ります。「でも、目の前で苦しんでいる人がいたら中立的立場で救う。それが赤十字であり、私たち医療に携わる者の使命なのです」。

紛争地域で活動する日本人がいることを知ってほしい

私たちの活動で助かる “いのち”がある

やくの思いで整備したそうです。

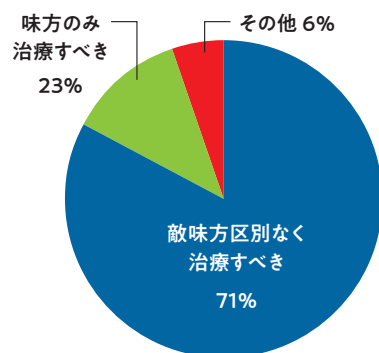
こうした場所では、医療スタッフの宿舎も十分ではありません。食べ慣れない食事を、群がるハエを追い払いながら食べるのは当たり前。トイレも穴を掘っただけのもので、雨が降ると汚水があふれてしまうこともしばしばという環境です。

それでも、豊かな自然は魅力。宿舎から診療所まで、ナイル川をボートで通いますが、夕暮れ時の空の美しさ、夜の満天の星空は格別だそうです。「僕はふだんからアウトドア好きだからあまり苦になりません。サバイバルの知識と技術があれば、より現場向きかもしれませんね」と朝倉さんは語ります。

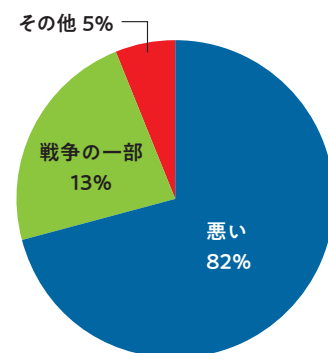
「日本から遠く離れた外国の紛争地域で活動している日本人がいること、そして、自分たちの活動で助かるいのちがあるということを知ってほしい」と朝倉さん。ICRCは現在も、シリア、イラクに次ぐ規模で南スーダンへの支援活動を続けています。

危機に立つ紛争地の医療支援

Q 武力紛争時、医療従事者は傷病者への治療をどうすべきと考えていますか？



Q 敵を弱めるために、病院や救急車、医療従事者を攻撃することをどう思いますか？



「戦争のルールは守られているか？」グローバル調査 (ICRC) より (2016年6～9月、16カ国で実施)

医療・人道支援者への攻撃をとめるための啓発キャンペーン動画
「Hope : Why we can't save her life…」
視聴はこちらから↓



7 負傷者を小型飛行機で搬送／8 毎日ナイル川を渡って通勤



南スーダン：2011年に独立。2013年12月に内戦が勃発して以来、不安定な情勢が続いています。政府軍と反政府軍の対立は現在も続いています



写真提供：ICRC

今回話していただいたのは、日赤本社国際部の2人です



日本赤十字社
国際部国際救援課
小川 桂
Katsura Ogawa

派遣期間
2018年6月18日～8月17日

「貝淵さんと同様、事務管理要員として派遣されました。暑さは日本の方が厳しいくらい。8月22日は『イード・アル＝アドハー』というイスラム教の犠牲祭で、家族や貧しい人々に牛や羊をふるまう習慣があることから、同じイスラム教のトルコ赤新月社は避難民たちに肉を配ったそうです。衣類を新調する文化を尊重し、日赤は避難民ボランティアに新しい洋服を配りました」



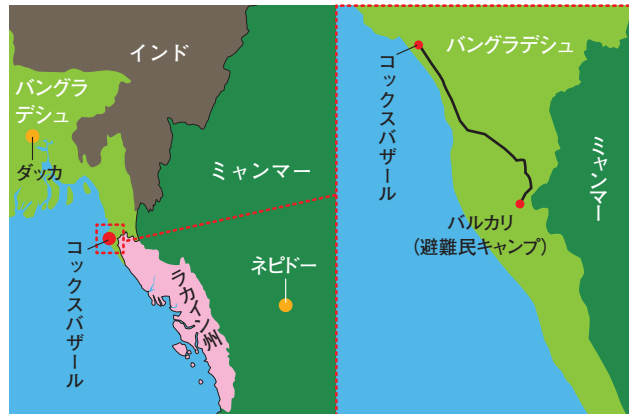
日本赤十字社
国際部企画課
貝淵 友紀
Yuki Kaifuchi

派遣期間
2018年4月21日～6月28日

「事務管理要員として医療スタッフの支援やキャンプ内のリスク管理などを担当。暑くて1日に2リットルのペットボトル2本の水を飲んでいましたが、ラマダン（イスラム教徒の義務のひとつである断食）の間、現地ボランティアは日中、水も飲みません。現地の文化に配慮する必要がありますが、どうしても喉が渇くので、隠れて水を飲むこともありました」

支援団体がキャンプで活動できるのは日中のみ

現在、100万人近い避難民がバングラデシュとミャンマーとの国境付近で生活しています。赤十字などの支援団体は現在、バングラデシュ南東部の都市、コックスバザールから車で1時間半ほどの距離（約40km）にあるバルカリの避難民キャンプまで通いながら支援活動を展開しています。



避難民たちは、故郷から4日程度歩き続けて山や川を越え、キャンプにたどり着いた



主な症例は呼吸器系の疾患や皮膚病で、女性や子どもの患者も多い

患者数は 1日約140人

日赤がバングラデシュ赤新月社とともにキャンプ内に開設している診療所では、バングラデシュ赤新月社の医師・看護師や他国の赤十字社などの外国人スタッフ約10人、避難民や現地ボランティア約50人で活動しています。患者数は1日に約140人。キャンプ内や周辺地域にはこのほか、スイス赤十字社の診療所や、フィンランド赤十字社による野外病院（24時間対応で外科手術も可能）もあります。

大量の避難民がバングラデシュに押し寄せてから1年余り。キャンプはもはやひとつの「街」になりつつあります。マーケット（市場）もできていて、キャンプ内で買い物をする 것도可能。食料だけでなく、電化製品や薬品も入手できるほどの充実ぶりです。



2017年8月、ミャンマー・ラカイン州での大規模な武力衝突によって70万人以上が隣国のバングラデシュに避難しました。以前に避難民となった20万人とあわせ、アジアで最大規模の人道危機となっています。国際赤十字の呼びかけに応え、日赤もいち早く医療チームを派遣し、その後も支援活動を続けています。

大規模な避難民発生から1年余り。緊急的な医療支援や診療活動から、避難民キャンプでの保健衛生の向上、現地医療スタッフの能力強化など、支援内容は長期的な視野に立ったものに移行しつつあります。

※国際赤十字では避難民の政治的・民族的な多様性に配慮し、「ロヒンギヤ」という表現は使用していません。

もはや、ひとつの「街」 バングラデシュ南部の避難民キャンプ

「予防」の知識を 広めるために

キャンプでの生活が長期化するなか、病気の予防が重要な課題となり、支援活動も予防のための教育にシフトしつつあります。まず、仮設診療所近くのキャンプの避難民たちに、手洗いなどの衛生や栄養の知識、脱水症予防のための経口補水液などについて学んでもらい、それを家族や地域の人々に広げてもらっています。



石鹸や洗剤、ろ過装置など衛生資材を配給しています



明るい表情で研修に参加する避難民の女性たち



おにぎりパーティーの開催

支援スタッフたちも 自炊生活

バングラデシュの支援スタッフは、事務管理要員のほか、医師や看護師などの医療スタッフで構成されています。現在はアパート暮らし。支援活動の後に食事の支度をするのは大変でしたが、現地のスタッフと食事会を開くなど楽しみも見つけています。

「僕たちもこの国は 初めてなんだ」

小川さんが、いつものように避難民のボランティアと他愛のない話をしていた時のこと。「バングラデシュは初めて？」と聞かれたので「初めてだよ」と答えると、悲しそうな表情で「僕たちも初めてなんだよ」と。「彼らのアイデンティティとミャンマーや故郷への思い、異国で暮らすことの大変さややりきれなさが詰まったひとことに、何も言葉が返せませんでした」(小川さん)。



小川さん



普段は明るく接してくれる彼らにむしろ元気づけられることも

長期化する避難生活 避難民たちの心に寄り添って



貝淵さん

いつもは 明るいけれど…

貝淵さんが印象に残った赤十字の女性ボランティア。自分の子どもも含めキャンプ内の子どもたちをサポートする仕事をしていました。ミャンマーでも先生をしていたそうです。いつもはパワフルで元気いっぱいですが、実は目の前で家族を焼かれ、暴力で親族を亡くしていました。「大粒の涙を流しながら、辛い体験を話してくれました」(貝淵さん)。



笑顔の息子を愛情深い眼差しで見つめ、健康を気づかう女性ボランティア

「水回り」が 避難生活の悩み

キャンプでの生活で最大の悩みは、やはり水回り。シャワーやトイレは、シートで周囲を囲っただけの簡素なもの。雨が降れば地面はドロドロ、汚水があふれた水たまりのそばでは、下半身裸の子どもたちの遊ぶ姿が…。衛生状態の悪さは感染症を引き起こす原因ともなり、深刻な問題です。



避難民の女性は「トイレも男性と一緒に、体を洗うところもない」と訴えます

働きたいが、 国籍がない

避難民たちは援助を受けるだけの存在ではありません。キャンプ内で援助機関の通訳をしたり、診療所で患者さんを案内するなど重要な役割を担っています。しかし、国籍のない避難民を雇用することは難しく、赤十字も交通費程度の日当は支払っているものの、ボランティアとして活動してもらっているのが現状です。



ボランティアの彼らが各家庭に手洗いの大切さを伝え歩いてくれます

部長、次長、日赤の国際活動ってなんですか？

「日赤」と聞くとどんなイメージが浮かびますか？「病院」「献血」…？海外で紛争や災害が起きた時、日赤は国際赤十字の一員として職員を救援活動に派遣しています。これまでの国際活動の歴史や、どんな思いで取り組んでいるのかについて、日本赤十字社の国際部長と次長に語ってもらいました。

(聞き手・NT編集部)

「人の役に立ちたい」
の思いで日赤へ

——はじめに日赤との出会いを。

田中 大学4年の時、身体障がい者の技能競技大会（国際アビリンピック）に赤十字語学奉仕団としてお手伝いに関わったのが日赤との出会いです。

菅井 私は就活をほとんどやらず、しかも大学4年なのに一般教養の哲学の授業が残っていた。その授業で「何のために働くのか」の問いにぶつかり、人のためになることをしたいなど。それで日赤の就職試験を受けました。

ベトナムからの難民を支援

——国際部での仕事で印象に残っていることは？

田中 国際部ではありませんが、入社後すぐに担当したベトナム難民支援※が思い出深いですね。当時、ベトナムのいわゆるボートピープルが日本に来ていて、日赤は国内に11か所の難民キャンプを運営していました。日本国内で国際活動に取り組んだと言えます。難民が抱える問題はさまざまです。

※ベトナム難民支援事業：ベトナム戦争（1955～1975年）による難民を日本国内の施設で受け入れた事業。昭和52（1977）年から平成7（1995）年まで実施。ピーク時には1000人以上を受け入れた。



難民キャンプ支援活動時のスタッフ & 難民たちと（後列、左が田中部長）



日本漁船に救助されたベトナム難民

田中
康夫
（日本赤十字社国際部長）

菅井
智
（日本赤十字社国際部次長）



す。母国では家族を養っていた世帯主が、難民になると援助を受ける立場になり、世帯主としての尊厳や立場が低下してしまう。そのフラストレーションなどからケンカが起きたこともあります。当時は「こころのケア」という言葉もありませんでした。難民の問題」と一言で言っても問題は一人ひとり違うんだと痛感しました。現在のバングラデシュ南部避難民支援でも、その頃の経験が役立っています。

空爆直後の町に入り
活動したことも

菅井 99年春、コンボ難民支援に関わりました。当時、コンボでは少数派のセルビア人が多数派のアルバニア人を弾圧。このセルビア人に対し、NATO軍が空爆を行なったのです。私は当初、アルバニアでコンボからの難民を支援していましたが、今度はコンボ国内で支援活動することになり、空爆から1週間後のコンボに入りました。アルバニアとの国境に近い西部の町で医療支援に取り組みましたが、セルビア軍が大量の地雷を敷設していて危険な状況でした。



「自分や大切な人を守るように」と包帯のやり方を学ぶボランティアたち

ボランティアこそが赤十字

——国際活動から得た教訓は？

田中 国内・国外での活動を問わず感じるのは、赤十字はボランティアで支えられているということ。彼らこそが赤十字なのです。中央アフリカ共和国の紛争地を訪問し



日本赤十字社 事業局 国際部次長
菅井 智 Satoshi Sugai

1985年入社。血液事業部に勤務後、厚生労働省に出向。1995年から23年間、国際部に勤務。2011年3月に起きた東日本大震災では国内復興支援事業を担当。2012年4月から現職。

ましたが、そこでも現地の赤十字ボランティアが活動していました。彼らは、「人を救いたい」「自分たちのコミュニティを再生したい」という思いで頑張っていました。しかし、そうしたボランティアの存在を当たり前だと思っていけない。

赤十字ボランティアが権利を尊重され、活動しやすい環境をつくるために、国際赤十字では当時の近衛忠輝会長（日本赤十字社社長）の下で2017年11月、ボランティア憲章を策定しました。被災者の人命と健康を優先し「苦しみの軽減」に努力することなど、ボランティアの責務や権利が定められています。

菅井 紛争や災害、貧困など、行政のシステムが機能しない中で、



日本赤十字社 事業局 国際部長
田中 康夫 Yasuo Tanaka

1982年入社。社会部（現救護・福祉部）でベトナム難民支援に携わる。その後、国際部へ配属。内戦後のカンボジアで病院再建の支援、ソ連崩壊後のロシアで医薬品支援に取り組んだ経験も。計12年間、IFRC（国際赤十字・赤新月社連盟）に勤務。保健学博士。2018年4月から現職。

世界中にあるネットワークを生かして

——日赤が国際活動に取り組む理由は何？

菅井 人道には4つの敵があると言われていました。「無関心」「利己心」「認識不足」「想像力の欠如」。国内外問わず、救いを求めている

唯一のインターフェイス（仲介役）になりうるのが、地元根を張ったボランティアを持つ赤十字ではないでしょうか。

田中 地元ボランティアは、傷んだ社会を癒し、再生する力も持っています。紛争や災害で傷ついた人々の心を再生する力になることが、ボランティアの大きな役割のひとつだと思います。

人に対し、分け隔てなく手をさしのべるのが赤十字の役割だと考えています。

田中 東日本大震災で、日本は援助を受ける側になりました。「明日は我が身」「お互いさま」という気持ちを持ちたいですね。災害多発国・日本で培ってきた防災教育や救護訓練の経験を、国際的に役立てていくことも目標です。

しかし、私たちができることはほんの一部です。やはり現地の一人ひとりが災害に強くなる必要があります。それがレジリエンス（回復力）です。

今後も、世界各国に赤十字ボランティアのネットワークを持つているという特色を生かしながら、困っている人々に手をさしのべていきたいと思っています。

「人の役に立ちたい」

だから赤十字のボランティア

白川恵さん（赤十字救護ボランティア）

地 域でボーイスカウトの活動をしていて、必要に迫られて救急法を受講したのが赤十字との出会いです。もともと、

母親が赤十字病院の看護師だったので、赤十字の存在は身近でした。家に赤十字マークのついた大きな救急箱があったのを、よく覚えています。

ボーイスカウトから赤十字の活動に軸足を移したのは、年を重ねるに従い、いろいろな人の役に立ちたいと思うようになったからです。私は関西生まれの関西育ち。結婚して東京に出てきた直後に阪神・淡路大震災が起きて、思い出のつまった神戸の街が壊滅的な被害を受けました。ずっと「私は逃げてきてしまった」という罪悪感を背負ってきたので、防災にかかわるボランティアにたどり着いたのかもしれません。

いまは東京都支部が実施して



「赤十字は人の心を大切にする組織だと感じます」と語る白川さん

いる減災セミナーや災害救護セミナーなどのお手伝いをしています。セミナーの内容についていけない子どもに、「三角巾はこうやって折るんだよ」と教えてあげることも。子どもたちの笑顔が見られたり、参加者から「ありがとう」と言ってもらえるとやりがいを感じます。

こちらが子どもから学ぶことも多いです。子どもたちはみんなとても素直で純粋。新聞スリッパづくりでも、こちらが指示しなくても、できない子のお手伝いをサツとやってくれるんです。感動しました。

昨年は島しょ訓練で八丈島に行かせていただきました。初めて炊き出しを経験して、多くのことを学びました。

赤十字の仲間や先輩たちが辛抱強く指導してくれたからこそ、いまの私があります。でも、救急法の知識や技能もまだ中途半端。周囲から「あいつがいるから大丈夫」と信頼されるように、もっと努力していきたい。そして、いつか海外の活動に参加するのが夢です。日本だけでなく、世界の苦しんでいる人に心を寄せていきたいですね。



JRC OMORI HOSPITAL

大森赤十字病院

- 所在地 〒143-8527 東京都大田区中央4-30-1
- 連絡先 Tel 03-3775-3111 (代表)
- 休診日 土曜、日曜、祝日、年末年始（急患は随時）
- 病床数 344床（一般326床、ICU・CCU 6床、HCU 12床）

救急科部長兼
脳神経外科副部長
荒川 秀樹
Hideki Arakawa



脳卒中と呼ばれる病気の中には、脳の動脈にできた瘤が破れて発症する「くも膜下出血」、脳の中の動脈が破れて発症する「脳出血」、脳の血管が詰まって発症する「脳梗塞」があります。

脳卒中は、どの疾患も早期の治療を必要とすることが多く、脳神経外科での救急対応が重要になります。当院では24時間365日対応できるよう、設備やスタッフの充実を図っています。

「時」は脳を助ける！

脳梗塞の治療は、ここ数年で大きく変化しました。特に、発症してから時間が経っていない場合は、tPAという血栓を溶かす薬の投与や、詰まっている血管にカテーテルを誘導し、特殊な機器を使用して血栓を取り除く手術を行うことなどで、劇的な症状の改善が得られる機会が増えてきています。

一方で、Time is Brain（時は脳を助ける）という言葉があるように、発症してから治療開始、ひいては血栓除去までの時間が早いほど有効性が高いことが知られています。救急搬送されてから、いかに早く診断を行い、必要な治療を安全に遂行できるかが重要なポイントなのです。

このため、医師、看護師、放射

線技師、薬剤師らの協力により、脳卒中对応のシステムを構築し、的確な診断と治療を行い、実績を積み重ねています。

予防のための外科的治療

致死率の高いくも膜下出血の原因となる脳動脈瘤破裂の予防には、「開頭クリッピング術」や、カテーテルを用いた「コイル塞栓術」が有効で、当院でもこれらの治療を行っています。コイル塞栓術の場合、入院期間も4～5日で済みます。

動脈硬化にともなう内頸動脈狭窄症に対しては、抗血小板薬の内服に加えて、狭くなっている血管を広げる手術により、脳梗塞予防を図ります。「内膜剥離術」と呼ばれる方法と、カテーテルによる「ステント留置術」という方法があります。

こうした予防手術を行う際は、手術前に詳細な評価を行い、必要な患者さんに対してのみ、適切な術式を選択した上でおすすめしています。

脳卒中の患者さんを救え！ 迅速な治療がポイント

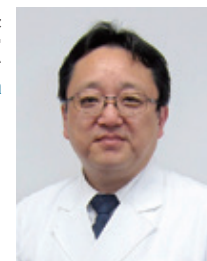


JRC MUSASHINO HOSPITAL

武蔵野赤十字病院

- 所在地 〒180-8610 東京都武蔵野市境南町1-26-1
- 連絡先 Tel 0422-32-3111 (代表)
- 休診日 土曜、日曜、祝日、5月1日（赤十字創立記念日）、年末年始
- 病床数 611床（一般528床、ICU 8床、HCU 22床、GICU 6床、SCU 9床、NICU 6床、GCU 12床、感染症20床）

病院長補佐／循環器科部長
足利 貴志
Takashi Ashikaga



武蔵野赤十字病院の循環器科の基本方針は、心臓救急疾患に対して適切に対応すること、高度な専門医療を行い、地域医療に貢献することです。

当院の循環器科では救急、専門治療を行っています。現在、14人のスタッフが力をあわせ、地域循環器医療の中心として機能できるよう、医師一人ひとりが責任をもって、高度に専門化した循環器疾患の治療にあたっています。

最新の治療法にも精通

循環器科では不整脈、虚血性心疾患、末梢血管疾患、心不全（弁膜症、心筋症を含む）と多様な病態に対応していく必要があります。私たちは循環器病学の豊富な知識と経験をもとに、地域循環器疾患の診療・治療の中心になれるよう日々、取り組みんでいます。

不整脈の治療としては、アブレーション治療、ペースメーカー治療、植え込み型除細動器を行い、当院は都内でも有数の症例数を誇ります。まだ一部の病院でしか行われていないバルーンを用いたアブレーション治療やリードレスペースメーカーなども積極的に取り入れています。

虚血性心疾患、末梢血管疾患に

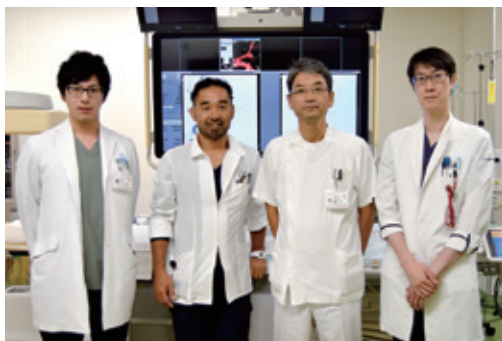
対しては、インターベンション治療を迅速かつ安全に施行。慢性完全閉塞病変や高度石灰化病変などの難易度が高い病変に対しても豊富な経験をもっています。

さらに、ロータブレーター治療、エキシマレーザー治療、ダイヤモンドバック治療などの難易度の高い治療にも精通しており、これらの手技の国内外の指導的立場にあるため、安全に治療が行えます。心不全領域ではエビデンス（根拠）に基づいた内服薬や点滴治療を行い、心臓の動きを助けるデバイスを用いて治療を行います。原因疾患を検索するべき検査法や適切な治療法も実施しています。

地域の医療機関とも連携

質の高い医療を実現するため、医師たちは治療・研究いずれの面でも切磋琢磨しています。

地域の先生方との連携もより高め、患者さんにより良い医療を提供したいと考えています。地域の医療機関から安心して紹介してもらえる循環器科をめざします。



脳神経外科スタッフたち



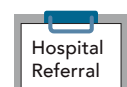
最新の機器で安全な治療を行っています



カテーテル治療のようす



循環器科のスタッフたち





JRC KATSUSHIKA MATERNITY HOSPITAL

地域のお産を守るために

病診連携懇談会を初開催

病診連携懇談会の開催は今回が初めて。近隣病院から14施設の参加がありました。

第1回目となる今回は、地域の医師の方々に当院の医療や医療連携について理解を深めていただくため、鈴木副院長と熊坂小児科部長が講演を行い、あわせて当院での医療連携について紹介しました。

オープンシステムの事例紹介も

熊坂小児科部長からは、当院へ搬送された新生児におけるビットフォール（落とし穴）について、事例に基づき講演。症例紹介として事例が多い呼吸器系、嘔吐、低血糖などを紹介しました。

鈴木副院長は、切迫早産薬療法のトピックスとして、①子宮収縮抑制薬使用開始時の留意点、②子宮収縮抑制薬使用中の留意点、③子宮収縮抑制薬を使用した後の留意点——について講演しました。

地域の医師たちとの連携強化にむけて

さらに、当院で現在実施しているセミオープンシステム（診療所等で健診を受診している妊婦さんが当院で出産するシステム）とバックアップシステム（かかりつけの診療所の休診時に、当院で受診できるシステム）の平成29年度の実績報告と登録状況、登録方法について説明しました。

患者さんが選べるシステムを

参加した医師たちからは、今回のような勉強会の定期的な開催を望む意見や、患者に関する情報共有を密にしたいとの前向きな意見が出されました。

今後は、患者さんの希望に応じてセミオープンシステムの連携協定を締結した産科施設への「逆紹介」をするなど、患者さんが選べるシステムを構築していきます。また、地域でお産を守る連携強化のために、10月から「患者相談・医療連携室（課）」もスタートさせます。



参加した医師たちからも好評でした



新生児搬送での事例紹介する熊坂小児科部長





血液センターのお仕事体験！

親から子へ「献血」でつなぐ想い

東

京都赤十字血液センターでは毎年8月、東京国際フォーラム（千代田区）で開催されるイベント「丸の内キッズジャンボリー」にブースを出展。子どもたちが白衣を着て、血液センターのお仕事体験をするワークショップを実施しています。

ワークショップでは一人ひとりに模擬血液を渡し、ウィルスが入っていないか調べてもらったり、ミニ遠心分離機による分離体験や血液の模型を使った梱包体験をし、最後に血液を病院に届けるまでを体験してもらいます。学生ボランティアが子どもたちをサポートしました。今年も3日間全ての回が満席となり、376人の参加がありました。「ふだんできない体験をさせてい」「子どもに献血や血液、いのちの大切さを学んでほしい」という声が寄せられ、大盛況のうちに終わりました。

「献血する姿を娘に見せたくて」

ワークショップ参加後、実際に献血ルームに足を運んで

くださった親子がいらつしました。お母さんによると、「ワークショップでの経験を、あとにも残る記憶にしておきたいと、実際に私が献血している姿を見せてあげたい」と思っていました。

お母さんが献血している姿を見て、娘のかほさん（小学3年生）は、「痛そうだった。怖い。でも、大きくなったら私も献血をやってみよう」と話してくれました。ワークショップでは、隣に座った子と意気投合して楽しくお仕事体験ができたようだ、お母さんが語ってくれました。

親子でいのちの大切さを考えるきっかけに

東京都赤十字血液センターは、これからも親子で「献血」を考えてもらう機会をつくっていきたくと考え、来年も出展を検討しています。いのちの大切さや献血について、ご家族で考えるきっかけにしたいだけだと思います。

※献血会場では採血で針を扱うため、混雑時等は安全上、お子さまの採血入室はご遠慮いただいております

ワークショップの流れ



03 血液を保管する



02 血液を分ける



01 血液を調べる



04 血液を届ける



05 自由研究用シート。希望者が多く、増刷するほどの人気ぶり



06 ワークショップのあと、お母さんと一緒に献血ルームを訪れてくれたかほさん

武蔵野赤十字保育園

いのちを守る知識と技術
幼児安全法を学ぶ

指導員がAEDの
使用法を説明

実際に
人形を使って
演習です！



武蔵野赤十字保育園には現在、赤十字講習指導員の資格を持つ職員が複数所属していることから、赤十字講習の開催会場にもなっています。赤十字の専門知識を一般の方々とも共有することで、いのちを守るための知識と技術を習得するお手伝いができればと考えています。

心肺蘇生の講習を実施

先日、子どもに対する心肺蘇生を学ぶ幼児安全法講習を行い、市民の皆さんにご参加いただきましたが、武蔵野赤十字保育園の職員も多くが参加しました。子どもは年齢や体格に合わせ異なる対応が必要で、幼児安全法で習得するスキルは、保育園では特に必要であると考えています。

初めて参加した職員は、はじめは戸惑っていましたが、だんだん声をかけ合えるようになり、積極的に取り組んでいました。講習をくり返し行うことで知識と技術、行動力を身につけ、事故に備えることができます。

今回の講習で職員は、いのちを守るための知識と技術とあわせ、命を預かる責任の重さを実感できる機会にもなりました。これからも赤十字の保育施設として、子どもたちが健やかに成長できるよう努めていきます。

赤十字子供の家

子どもたちを
水の事故から守るために

WELFARE
FACILITY
NEWS

夏は水遊びや水のある遊び場に行くことの多くなる季節。当園でも例年、海やプール、川の近くでのキャンプなどに行くことがあるため、今回改めて職員たちに、水難事故のリスクと対処方法を学ぶ研修を行いました。

子どもの溺水には心肺蘇生が不可欠

研修当日は東京都支部の講師である三井俊介さんから、事故の発生要因や水遊びを行う際の事前準備、事故が起きてしまったときの対応方法を教えていただきました。実技研修では心肺蘇生とAEDの使い方の指導も受けました。

半数以上の職員がこれらの処置を学んだ経験がありますが、改めて行ってみると、処置の手順や子どもに対する処置に戸惑うことも多く、実技研修の大切さを痛感。職員からは、さまざまな状況を想定しての質問も多く出されました。

水遊びはとても楽しいものですが、常に危険と隣り合わせであることを忘れず、今回学んだことを今後の行事や活動に役立てていきたいと思います。

水難事故の対応に限らず、心肺蘇生などは全職員が身につけていたいスキルであるため、今後も計画的に練習の機会を設けていきたいと考えています。

研修には大勢の
職員が参加。久しぶりの
実技に戸惑う人も



海水浴。
たくさん遊んで、
ちょっとひと休み



活動資金協力者(社)・団体のご紹介

皆様のご協力により日本赤十字社の活動は支えられています。
活動資金のご協力、誠にありがとうございました。

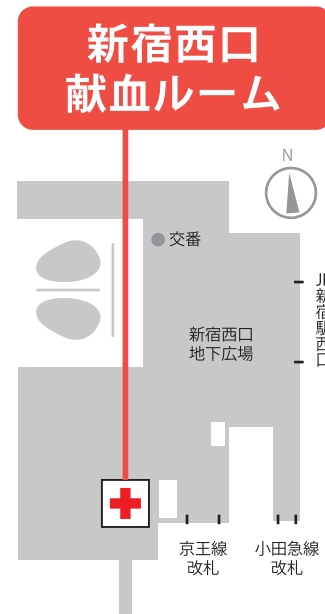
※10万円以上のご寄付をいただき、掲載をご了承いただいた個人、法人および団体等を掲載しています。

活動資金協力に関するお問合せは
東京都支部 振興課 03-5273-6743まで

●千代田区		熊倉 登久子	10万円	新日本電興(株)	10万円
(株)木村洋行	500万円	白井 芳子	10万円	(株)ダイシン	10万円
光興産業(株)	50万円	(一社)大森倶楽部	100万円	(学)東京聖栄大学	10万円
(株)朝日写真ニュース社	30万円	(株)三功工業所	100万円	●江戸川区	
(株)谷口楽器	10万円	●世田谷区		岩橋 孝男	10万円
日本ノーデン(株)	10万円	田中 初枝	60万円	東京デザインハウス(株)	50万円
●中央区		谷村 将光	100万円	(株)三和製作所	10万円
浜田 寛子	10万円	(株)ウッディ	10万円	●八王子市	
東京都築地中央市場福祉報徳会	100万円	みその商事(株)	10万円	(有)ビー・アイ	20万円
(一財)寧波旅日同郷会	10万円	●渋谷区		●立川市	
●港区		(有)外川ビル	50万円	荒井 三代子	10万円
(株)ジェイビーホンダエーゼンシス	100万円	ジャパンセラミックス(株)	10万円	中村建設(株)	70万円
イーパートナーズ(株)	30万円	(有)宮泰	10万円	立川赤十字奉仕団まつり	10万1,991円
(一社)日本血液製剤機構	10万円	矢崎不動産オフィス(株)	10万円	●武蔵野市	
(有)藤井クリーニング	10万円	●中野区		齋藤 八郎	10万円
●新宿区		佐藤 みゑ子	10万円	●三鷹市	
出井 弘八	20万円	●杉並区		佐藤 多満代	10万円
稲垣 杵一	20万円	齋藤 典子	50万円	志賀興業(株)	20万円
(株)アイザワビルサービス	425万円	外川 清	50万円	●府中市	
(一財)飛鳥社会福祉財団	156万4,487円	石井 明	10万円	匿名	10万円
(株)プライムステーション	10万円	岡部 好延	10万円	●調布市	
●文京区		金森 満寿枝	10万円	ユウキ食品(株)	40万円
市村 浩一	100万円	人仁の会	137万3,257円	ユウキフーズシステム(株)	30万円
(株)カワサキ	50万円	●豊島区		(株)オリヴ ドゥ リュック	10万円
(株)加藤萬製作所	20万円	NPO法人 酒は未来を救う会	60万円	●町田市	
(株)アークステーション	10万円	住友機材(株)	30万円	加藤 信男	10万円
●台東区		新興電機(株)	10万円	藤井 洋子	10万円
光正不動産	10万円	6etアプリ(株)	10万円	(株)ユニテックス	100万円
●墨田区		●荒川区		(株)ソルシステムズ	50万円
角谷 かつみ	10万円	(株)トリガ	20万円	●国分寺市	
アサヒ飲料(株)	20万円	(株)美箔ワタナベ	10万円	清水 弘樹	500万円
●江東区		●板橋区		●国立市	
坂元 左	10万円	(有)エヌティ・エイト	10万円	渡辺 恵子	10万円
(株)システック	500万円	(株)曠淳開発	10万円	●狛江市	
(一財)東京都営交通協力会	100万円	(株)つくし工房	10万円	高木 和江	20万円
●品川区		●練馬区		●清瀬市	
金森 利幸	10万円	水島 磐男	50万円	(株)アーダブレーン	10万円
長谷川 植夫・裕見	10万円	(株)関建設工業	10万円	●多摩市	
(株)学研メディカル秀潤社	10万2,274円	●足立区		田口 久志	100万円
(株)オーツカ光学	10万円	鈴木 勇	10万円	柚木 ミエ子	10万円
(株)小野電機製作所	10万円	増山 元美	10万円	●瑞穂町	
品川合同葬祭(株)	10万円	中里建設(株)	20万円	(有)アサカ運輸サービス	50万円
(株)ディー・ワイ・オー	10万円	(株)ナカネ	20万円	●千葉県	
●目黒区		●葛飾区		(株)ドリームワン	10万円
(株)原田畜産商店	10万円	吉田 和代	10万円		
●大田区		(株)稲葉製作所	10万円		

(敬称略・順不同)

OLレポーターオカモト★日赤とつげきレポ 紹介献血ルーム



🕒 受付時間

▶ 成分献血
実施なし

▶ 400・200mL

11:00~12:45 / 14:00~18:45

☎ 電話

03-3348-1211

📍 場所

〒160-0023 新宿区西新宿1丁目 西口地下街1号

📅 定休日

12月31日・1月1日

NT Vol.19
2018年10月発行
NISSEKI TOKYO

■発行・編集・デザイン／日本赤十字社東京都支部

〒169-8540 新宿区大久保1-2-15 Tel:03-5273-6747 (総務部企画課直通)

※本誌掲載の記事・写真・イラストなどの無断転写(コピー)、複製(転載)を禁じます。

※本誌に掲載されている情報は、発行に伴う情報収集時点での情報を含みます。その後の内容に変更が生じる場合もありますので予めご了承ください。

ホームページ: <http://www.tokyo.jrc.or.jp/>

Facebook: <https://www.facebook.com/redcrosstokyo/>

年4回発行(4月・7月・10月・1月)

日本赤十字社東京都支部にご寄付いただいた方に郵送でお届けしているほか、都内の赤十字病院及び献血ルーム・献血バス等の献血会場でも配布しています。

バックナンバーはホームページでも
ご覧いただけます。

日赤 NT

検索





Present



日本赤十字社東京都支部の協賛企業様からご提供いただいています。ご応募、お待ちしております！

A.



3名様

名刺入れ（カードホルダー）

ダイアナ株式会社

牛革の名刺入れ兼カードホルダー。日本製。トカゲ型押しタイプ1点、エナメルプリントタイプ2点。カラーはいずれもキャメル。いずれか1つ（種類は選べません）。

B.



メールからのご応募限定

190ml
24本入り
3名様

レッドブル・エナジードリンク

東京キリンビバレッジサービス株式会社

レッドブルは、トップアスリート、多忙なプロフェッショナル、アクティブな学生、ロングドライブをする方など、世界中で評価をいただいています。

C.



555ml
24本入り
3名様

アミノサプリC

東京キリンビバレッジサービス株式会社

アセロラ果汁とレモン果汁を使用した、甘酸っぱいおいしさの回復系アミノ酸オルニチンとビタミンCを気軽に摂取できる健康飲料です。



プレゼント応募方法



①氏名 ②郵便番号 ③住所 ④年齢 ⑤性別 ⑥メールアドレス
⑦本誌入手場所 ⑧本誌でよかった記事（複数回答可。メールの方は、はがき記事一覧から番号でご回答ください） ⑨本誌の感想（100文字程度） ⑩希望するプレゼント番号を明記し、**メール**または**はがき**でご応募ください。抽選でプレゼントが当たります！
締切は**2018年11月30日**必着。当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。

メール

nissekitokyo@tokyo.jrc.or.jp

件名には「プレゼント応募」とご記入ください。

はがき

添付の専用はがきでご応募ください。

※いただいた個人情報はプレゼントの発送および当支部からの連絡のみに使用します。お寄せいただいたご意見・ご感想は個人が特定できないよう配慮したうえで当支部が行う広報に活用させていただく場合があります。製造状況等によりプレゼントの内容が変わる場合もございます。

読者の声 (vol.18)



災害時の水洗トイレの頼りなさや携帯トイレの重要性がわかりました。普段何も考えずにトイレを使って生活していますが、自分の排泄回数、自宅の状況（下水道OR浄化槽）、地域の防災環境について意識的に知り、関わろうと思いました。

東京都・22歳・女性（献血ルーム吉祥寺タキオン）

普段あまり接する事のない分野の記事を拝見する事ができて、勉強になりました。『職員通信』の着衣浮きは全く知らなかったので、緊急時にパニックにならずに済みそうで、とても役立つ情報でした。

東京都・50歳・男性（新宿東口駅前献血ルーム）

人命救助が必要となるケースは日常生活の中で不意に訪れますが、そのような中でも、冷静に対応し、人命を救った高津さんの勇気に拍手喝采を送りたいです。改めて、普段から危機的状況に対応できるよう準備をしておくことが重要だと感じました。

東京都・36歳・男性（府中・白糸台文化センター）

「献血をすることで誰かの助けになれるかもしれない」というのは理解しつつも、今まで足が遠のいていましたが、思い切って入ってみると、温かく迎えてくれる職員の方がいました。献血の必要性、生きる上で知っておくべき情報を丁寧に書いてある情報誌があるのはとても重要なことだと感じました。

埼玉県・26歳・女性（献血ルーム池袋ぶらっと）

平成30年北海道胆振東部地震での支援活動

北海道胆振東部では9月6日に震度7の揺れを観測し、土砂崩れなどの甚大な被害が発生しています。日赤では発災直後から傷病者の救護活動を開始。特に被害の大きい厚真町を中心に、保健医療ニーズの調査や巡回診療、こころのケアなどを実施。都内の武蔵野赤十字病院からも救護班を派遣したほか、避難所などに毛布や安眠セットなどの救援物資も配分しました。今後も日赤は、避難生活を強いられる方々に向け、息の長い支援活動を展開していきます。



1



2



3

- 1 多くの犠牲者が出た厚真町の被災状況
- 2 避難されている方々の安心のために避難所では24時間体制の救護所を開設
- 3 複数の都道府県から集結した医療救護班が連携して支援活動を展開

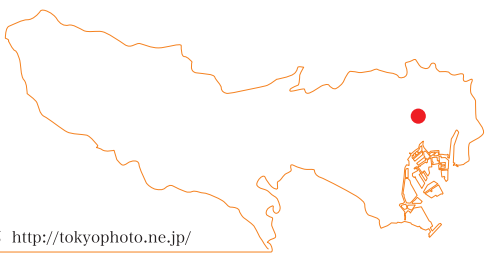
このような被災地での活動や被災された方々を支える救援物資を含めて日赤の活動は皆さまからお寄せいただく活動資金により運営されています。皆さまの温かいご協力をお願いいたします。
(添付の払込取扱票をお使いください)



+ 東京観光写真倶楽部 TOKYO SIGHTSEEING PHOTO CLUB

写真とはまさに「光を観ること」。東京を〈観光〉しながら撮影を楽しむことを目的とし、2005年に発足した同倶楽部は、東京諸島を含む都内各地で撮影会を開催している。部長を務めるのは、日本赤十字社契約写真家である菅原一剛氏。東京の写真撮影を続けている同倶楽部とコラボレーションした連載が、Rediscovery TOKYOです。

菅原 一剛HP <http://ichigosugawara.com/> 東京観光写真倶楽部 <http://tokyophoto.ne.jp/>



Rediscovery 東京を、再発見しよう TOKYO



第12回 谷根千

JR日暮里駅を出るとすぐに谷中。そこから根津、千駄木と、台東区と文京区に渡るこの一帯は通称《谷根千》と呼ばれている。

カメラ片手に谷中を歩いているつもりが、住所表示がいつの間にか千駄木になったり根津になったり…。それほど広くないこの場所に、休日ともなると“下町風情”を求めて観光客が押し寄せる。

谷根千に昔ながらの佇まいが残っているのは、太平洋戦争の戦火を逃れ、戦後の大規模開発も及ばなかったという偶然が重なったためだそう。

そんな場所だからだろう。ガイドブックが出版され、国内のみならず海外から観光客が訪れるようになって、ここにはしっかりと人々の生活が息づいている。路地を歩いてみると、食事の準備をする音やにおい、テレビの音や家族の会話が、壁や窓のすぐ向こうから伝わってくる。

そう。谷根千を歩くなら、迷子になるのを心配するのはやめよう。むしろ積極的に路地へと迷い込み、この街ならではの出会いを楽しみたい。

赤十字職員からNT読者の皆さんに、お役立ち情報をお伝える「職員通信」。第2回は、赤十字活動資金の募集を担当する郷原貴利職員がお届けします。

職員
通信
Vol.2

寄付したお金の使われ方
「赤十字活動資金」ってなあに？

赤 十字活動資金とは、災害時などにおいて、日本赤十字社が苦しんでいる人々を救うために必要な事業資金です。台風や地震などの災害が多発する近年、医療救護班の派遣や救援物資の配分などの支援活動を行う機会が増加しています。また、被災した都道府県等から依頼される義援金※を受け付ける際にも、義援金の管理や送金、領収証の発行、發送業務などを日本赤十字社が担っていることから、それにかかる経費も赤十字活動資金から出されています。赤十字活動資金にご協力いただくことは、まさに苦しんでいる人々に直接的に支援を届けることであり、人から人へ伝わる心のこもった支援になります。

※義援金は、被災都道府県等に設置される義援金配分委員会を通じて、**全額**が被災された方々へ届けられます。

赤十字活動資金の特徴

- 直接苦しんでいる人々に届く支援活動に使われる
- 災害時の義援金事務費にも使われる
- 思いやりの「心」が、苦しんでいる人への支援につながる



今回、お届けしたのは…

日本赤十字社東京都支部 振興部 振興課 法人社員係長
郷原 貴利 ごうはら たかし

東京都赤十字血液センターで献血推進業務に従事したのち、平成27年より現職。座右の銘は、「最大の敵は我にあり」。プライベートでは、子どもたちに相撲を教える指導者として精力的に活動している。

ご寄付の
お願い

日本赤十字社では、9月に発災した平成30年北海道胆振東部地震でも被災者の命と健康を守る活動を行っております。皆さまの温かいご支援を何卒お願い申し上げます。詳しくは本誌P33をご覧ください。

